



目次

*はじめに・自然破壊、その最たるものは戦争である	1
*特集「弘前公園有料化を考える」(第2回)	2
*特集 岩木山のコマクサ	3
・調査報告と本会の対応	3
・青森県自然保護課の対応	4
・岩木山ものしりマップとコマクサ写真	4
*岩木山環境保全協議会とミズバシヨウ沼周辺の刈り払いの報告	6
*事務局からのお知らせ	8
*編集後記	8

10月下旬、山頂と赤倉尾根、赤倉切戸山稜。前景は往年の草山の名残を示す

尾花の群れ その日は百沢口から登り、山頂を経て赤倉口に下山した。10月も末になると日ごとに寒さを感じようになってくる。特に晴れた朝の放射冷却は厳しく、その日も山頂付近の「陽を浴びない」場所は凍結していた。特に赤倉道の頂上直下と大崎沢源蔵部の斜面は凍結が激しかった。何度か、滑り落ちそうになりながらようやく聖観音が立つやや平坦な道に出た。すでに、午後2時半を回っていた。晩秋の日暮れは早い。まさに、釣瓶落としである。

また、「不法な」整備がされてない時期である。「掘り出した石」で造られた「階段」のない道は実に降りやすい。注意しながらも走るように降りる。2時間後には大石神社にいた。馬の石像が多い。これはこの辺りが昔から「草山(冬期間馬の飼料にする草を刈り取る場所)」であったことの名残

だ。あとは、弥生まで歩き、5時45分のバスに乗ればいいだけとなった。
はじめに

自然破壊、その最たるものは戦争である

NHKのBSハイビジョン特集で「硫黄島」を見た。そして、「発信箱：死者たちの8月から」(毎日新聞8月12日 東京朝刊)の真の意味とその深さに気づいた。
『8月は：言い換えれば、生きている者にとつて、死者たちには思いをはせる月である。ことに原爆や空襲の犠牲者は、戦争の結果として、尊い命を奪われた。何の罪もない人々であった。』

詩人の石垣りんさんは「弔詞」でこう詠んだ。△死者の記憶が遠ざかるとき、同じ速度で、死は私たちに近づく(中略)。戦争の記憶が遠ざかるとき、戦争がまた 私たちに近づく。そのでなければ良い。八月十五日。眠っているのは私たち。苦しみかきこえているのは、あなたたち。行かないで下さい。皆さん、どうもここに居て下さい。V8月は、戦争を忘れてはいけないうちを悲しませてはならない。お盆に帰ってきた天国の死者たちをアメリカ軍に破壊され尽くす硫黄島の情景を見て、特に石垣りんさんの詩の「戦争の記憶が遠ざかるとき、戦争がまた私たちに近づく。」が私の脳裏に突き刺さった。

「戦争の記憶」を遠ざけてはいけない。日本は今、「戦争への道」に向かっている。歩み始めているのではないかと、いうことへの検証と告発の意味がそこにはあった。「目覚めよ、眠っているはいけない。」と見ている間この詩は私に言い続けた。

私は「国」というものの、その「国」を動かしている為政者のエゴと身勝手さに、死者に対する悲しみ以上の「憤り」をあらためて持ったのである。

戦争は、今世紀の主題である「自然や後生との共存・共生」を徹底して拒むものである。

戦争は為政者の私利や国益の満足のために、多くの命を死にさらし、緑を奪い、後生に供給される「すべて」を奪いとるものである。自然破壊は「未来への投資を拒絶すること」であるが、その中でも、一番悲惨な自然破壊は戦争である。「自然保護」を訴える私たちはどんな「戦争」も認める訳にはいかない。

岩木山を考える会 事務局長 三浦章男

現市長は「新しいまちに新しい風を」というスローガンを掲げた。市民の殆どは「何か金澤市政とは別な新しいこと」と考へて期待に胸をふくらませたはずだ。私もその一人である。風は目に見えない。市民は肌で感じる。耳で聞ける金澤市政では吹かなかつた。「風」を期待している。「政務調査費なし」は新しい風であつた。

ところで「弘前公園入場料問題」は「無料」という方向でなければ新しい風にならない。入場有料化であれば、それは前市政の継承に過ぎないからだ。市議会議員に言いたい。市民にとつて「弘前公園」とはその歴史的、自然生態系的背景はどのようなものであつたのかを「すべての市民からの付託に応える」という使命を持つて勉強してほしい。

「弘前公園」が持つ歴史的遺産と里山としての自然的な遺産、および本丸で岩木山を拝むという市民感情が有料化とどう結びついているかを学習してほしい。そうしたら、きつと、活動範囲に「弘前公園有料化反対」という一項が登場するはずである。あなた方はそこで市長の言う「新しい風を吹かせる」ことになるのである。

2. 弘前市の「公園」に対する視点は「観光客」、そこに「弘前市民」は存在しない

弘前市には1700余名の職員がいるという。それに数十人の市議員もいる。その中の誰もが「弘前公園が『自然豊かな里山』の生態系がしつかりと確立されていた緑の里山」であると考えなかつたといふ。『自然の遺産』という視点で弘前公園を捉えていなかったとすれば、市民にとって、これくらゐの「行政」はないと言える。

2月に弘前市が行った公園有料化見直しのアンケートの質問項目には、「有料化」を継続していくという立場でのものがつらなっている。この点でも「不毛」は顕著であろう。この「不毛」を生み出しているものは、前金澤市政を支えてき

3. 困いのない郷土精神のために入場有料化の撤廃を

弘前出身でジャーナリストの鎌田慧は、講演会「私の岩木山」で「困いのない郷土精神を取り戻すためには、公園入場有料化は撤廃すべきだ」と語った。同年、A紙に「故郷の風景カネにかえるな」という題で次のように書いている。

『……これまで、市民がごろのふるさとしていた風景を、だれかが勝手に囲いをつくつて出入りを禁じ、カネを要求するな
どできないはずだ。それは故郷を売る行為でもある。カネ、カ
ネ、カネ。郷土の精神を形成してきた風景までカネにかえよう
とする貧しさが悲しい。』(抜粋)

金銭的束縛のない中、自由に「本丸に上がり、岩木山に向かい合掌する」という信仰的な行為を、きわめて当たり前にしてきた。これは弘前市民にとって廃藩置県以来の長い歴史的な慣習、無形の文化でもある。

「我が町の象徴でもある岩木山を弘前市は本丸から見せてお金を取っている。許されることではない。」という岩木町民の発言からも分かるように「入場有料化」に対する反対や批判は岩木町でも根強かつた。これは「拝観料の入場料徴収に対する義望」

ではない。
対価を超えた崇高な存在である岩木山を拜ませて金を取ると
いうことが許せないのだ。この発言には、岩木山を金銭の対象
とした冒流的な行為に対する憤りが籠もっている。岩木山を誰
にも売り渡したくないという深い愛情の吐露だ。やはり、「本
丸に上がり岩木山を拜む」という行為には、金銭という囲いは
馴染まない。

4. 風水説から弘前公園入場有料化を考える

有料化の議論には「都市公園」的な視点が中心にあつて、「観
光・集客」という面に傾斜し過ぎていっているように思える。公園の
持つ「風水」に基づいた歴史的、文化的遺産という面なども議
論には必要である。本丸のある公園は風水をうつしとつてい
る。風水では東北が鬼門なので、その方角の天守閣周辺の堀は「角」
になつてくついている。ただ、その東だけは「角」があまり目立たない。
「鬼門くずし」となっているそうである。

「有料化による隔絶化」を考える時、「鬼門くずし」の東北
に「茶畑町」のあることが非常に重要な意味を持つであろう。
本州最北の地にどうして「茶畑」なのかと訝る人もいるだろう
が、「ここでは茶が栽培されていた。その昔「茶」を「邪」（じ
や）と読み、「茶を摘む」は「邪を摘む」に転訛し、「茶畑町」
はお城に降りかかる「邪悪」を摘み取る役目の町並みであつた
わけである。このようにお城と町並みはしつかりとつながつて
いた。この「風水説」からも「本丸」は町並みとしての旧市街
から「隔絶」された場所ではなく「公園」を含んだ連なりとして
の「同一区画」であることは明らかである。

風水：（山川・水流などの様子を考え合せて、都城・住宅・墳
墓の位置などを定める術。特に、中国や李朝鮮では墓地の選
定などに重視され、現在も普及。（風水説。岩波・広辞苑から）
（この特集は次号に続きます）

※ 特集 ※ 岩木山のコマクサ

コマクサ生育調査の報告と本会の対応 （写真は調査当日撮影したもの）

7月18日、継続3年目となる

コマクサの生育調査を青森県自然保護課と合同で
森長技師1課、本会から
人た。ほか事務局が参
には会務局長が参
加した。竹谷両幹事が



★花の数・そのほかに
いて：昨年7個の花しか
けなかつたが、今年は3
0個増えた。今年は3
し、個が増えた。今年は3
に、花の大きさは、小振
り、花の大きさは、小振
に、花の大きさは、小振
短く、花の大きさは、小振
★株について：1株で
全体として、1株で
あるが、その面積がこれ
までより直径で12cm広
がついて、直徑で12cm広
さいが、直徑で12cm広
見られる。株立ちが一本

★その他について：今年、実生から芽を出したと思われる一葉の新芽が、周囲の
「礫岩」の下に多数見られ、しかも、昨年までの新しい葉芽は
50以上増えて、その場所を拡大させている。実生からの「新
芽」である一葉のものは、周囲の「礫岩」の下にもっと多数あ
るものと思われる。

★今後どうするか：結論は、「現場」では出来なかつた。ただ、自然生態学的に
は「持ち込まれた種がまかれて育つた」と確認した。抜

いて「抜き取り処理」が「正論」であること、八甲田山の「コマクサ」問題が
まだ「抜き取り処理」が「正論」であること、八甲田山の「コマクサ」問題が
との整合性も考えなければいけないのだらうとの意見や考え方が

科学的な「冷静」な目ですて、人間的な情感で、目の前では「美しく、かわいげ」に咲くコマクサを見ていると、「おまえには罪はないんだよね」と思えてくる。

改めて、持ち込んで「植栽」したか、「種」を蒔いた人の軽薄でしか「罪深い」行動をうらめしく思った。そして、その「このまま、自然淘汰されていく」ことを願ったりした。

このような感情は抱くが、本会の基本姿勢はまず、この三マクサのDNAを調べ、どこの山のものか、国内のものか、外国産の園芸種かなどについて詳しく調べてから「抜き取り処理」をするということである。

出来るならば、「他山のもの」「外国産の園芸種」であるコマクサが今後どのような生育を岩木山で続けていくのかを、さらに年数を増やして継続調査していくことも必要であるように思われる。そのためには「現場」が、登山客等によつて荒らされないようにすることが非常に大事になるだろう。

★岩木山に本来自生しないコマクサの取扱いについての情報が、平成17年に「岩木山を考へる会（会長 阿部東氏）」から県自然保護課に寄せられ、調査したところ、1株生育しているのが確認されました。

このコマクサは人為的に植えられた可能性が高いものの、植に調査する必要があることから、自然公園法により植物の採取・損傷が規制されるコマクサを除去する場合にあつては自然公園法に基づく許可手続が必要で、このため、すぐには除去せず、生育状況や周囲の植生への影響を観察するとともに、人為的に植えられた可能性を調査することとしました。

★ コマクサの自生について、過去の文獻に記録がなく、植物の學識経験者に聞いたところ、コマクサの自生は確認され、近いところでは、生荒地が登山道から比較的近くにあり、アクセス不能な場所ではないこと、今になって初めて発見されるということは極めて考えにくいものです。よつてこのコマクサは人為的に持ち込まれたものであると判断されました。

平成17年から平成19年まで3年間観察したところ、株の大きさが大きくなり、花茎の数が増え、さらに、こぼれ落ちた種から発芽した実生が株の周囲に増えていました。周囲の植生への影響はみられないものの、コマクサの生育は旺盛で、火山砂礫地に生育範囲を拡げる可能性があるものと考えられました。

このまま放置すればコマクサが火山砂礫地に拡がり、定着する可能性が高く、岩木山固有の自然景観が変わり、長い年月をかけて形成された自然生態系への影響が懸念されます。このため、このコマクサを早期に除去するのが望ましいという結論に達しました。

★(今後の対応について)
除去にあたっては、これまで学識経験者の方々の理解を得られていますが、さらに関係者へ情報提供したうえで、早い時期に除去作業を進める予定です。
このコマクサは誰かの手により植えられたものと思われるが、固有の自然生態系が守られている地域にあつては、望まれます。



き、他地域から故意に植物を持ち込み、植え付ける行為は、自然に反した行為であると言えます。今回の事例を機に、今後、このようなことがなくなるような機会ある毎に啓発していきたくと考えています。

(平成19年8月9日)

(写真はお6年9月の調査)

「岩木山ものしりマップ」と「コマクサ」写真について

本会が「岩木山環境保全協議会」の一員になってから数

いもの、つまり「異物」を持ち込むことは決して許されないことなのである。この立場から「コマクサ」を植栽し、種を蒔いた行為は厳しく批判されたものである。

しかし美しく可愛らしく「珍しい」花が、「おらほの岩木山」にあってもいいではないかと言う人もいた。八甲田山や白神山地には「コマクサ」が岩木山で咲くとなると、しかも比較的 safely 誰かが「行ける」場所に「生育」しているとなれば「観光客集め」の手段として大いに有効と考える人もいた。この「コマクサ」の咲く岩木山を大いに宣伝するべきだとする人たちがいたのである。

だが、「コマクサ」自体も自然に「消滅してしまった」かのようには「見えなくなつてしまった」ので「岩木山のコマクサ」問題はいつの間にか話題に上らなくなった。

ところが、05年に再び登場したのである。いや、本当はすでに何年も前から「咲き出して」いたのであらう。

岩木山の「コマクサ」は「異物」である。その場所の自然を壊してしまふ。本来そこに生えている植物が枯渇してしまふ恐れもあるのだ。

その「場所」には行くという意志のある者ならば、歩きやすいルートなので、誰でも行けるのである。誰でも行ける場所に「コマクサ」が咲いていけば、きっと多くの人がやつて来ることに違いない。「岩木山には普通咲かないコマクサ」を楽に見ることが可能となれば、もつともつと多数のお客がやつて来そうである。多くの「お客」がやつて来ることで、すべての「観光産業」を支えるというのが原則だ。だから、「コマクサ」はこの意味で「岩木山観光」の「目玉」となりうるであらう。

しかし、この手段は、正攻法ではない。まるで「不二家」や「ミートホープ」の手法とそっくりではないか。「フイクション」を「ノンフイクション」として見せようとするものだろう。「コマクサ」の「見せ物」にするのではやめよう。このコマクサは本来この岩木山にはないものである。つまり、ウソごとであり、ニセモノなのである。「ニセモノ」を「ホンモノ」と偽る行為は犯罪である。

「岩木山ものしりマップ」に「コマクサ」の写真を掲載したことも「ニセモノ」を「ホンモノ」として紹介した「偽り行為」であることに変わりはない。この小冊子「岩木山ものしりマップ」は岩木山に登らない一般の観光客にも配られている。より多くの人々が、この「偽情報」を掴ませられて、それを信じたのである。これは罪深いことだ。

しかし、編集した人々には、おそらく他意はなかっただろう。ただ、この「コマクサ」が人工的に「植栽」されたという事実を知らないままに、美しく、可愛い花「コマクサ」が岩木山にもあるのだということを、多くの人々に知ってもらいたかったのだ。そう信じている。だからこそ、次の大改訂では「コマクサ」の写真は謝罪と反省を込めて、削除する。

その後、現在咲いているこの「コマクサ」を一体、誰かが植えたのだらうか。誰が種を蒔いたのだらうか。それとも数年前のものが、また芽を出して花をつけたのだらうか。植えた人、種を蒔いた人、あなたがたは間違っている。「岩木山ものしりマップ」に写真を掲載した行為は仮に許されるとしても、あなた方は決して許されない。

もし、この人々と関わっている人たちがいるのならば、本来の岩木山の「植生」を守り、岩木山の自然を保護するために早急に「抜き取り」をしてもらいたいものだ。ただ、この「場所」は特別保護地区に指定されているので、勝手に「抜き取る」ことは出来ない。「法律」は厄介である。

本来生育していないものを持ち込んで「植える」「種を蒔く」行為は盗掘と同じように絶対してはならないことである。これらの行為は「盗掘」と同じように、法的にも厳しく処分される。「鳥が種を運んで来たのではないか」という人もいる。しかし、この仮説には、「鳥が運んで来るものならば、すでに数百年数千年前からこの場所にコマクサは生えているのである」と反論しておく。

本会と県自然保護課、林政課、岩木町の四者は05年9月30日に、まずこの「コマクサ」の「小群落の下部には実生と思われる小さい株が十本ばかり出ていること、また南に向かつて別な株分けも出ている」という事実を確認し、「数年にわたつて観察を続けた上で、抜き取りを含めて、どうするかを各分野の専門的な立場の意見を加味しながら決定する」という方針で以後06年9月、07年7月と二者で調査をしてきたのである。

※岩木山環境保全協議会と「ミズバシヨウ」周辺の刈り払いの報告※

★「岩木山クリーン作戦」今年「休止」・「岩木山ものしりマップ」の改訂と補遺を本会が担当★

6月中旬開かれた「岩木山環境保全協議会」で「岩木山クリン作戦」を今年度は「休止」ということを決めた。あくまでも、「休止」であって「中止」ではないことに注目してほしい。そこには来年度から「復活」という含みがあるのだ。その理由は、昨年あたりから、旧岩木町管内の各団体が独自に「清掃活動」を始めているということである。新弘前市になったこともあり、これまでの「町主導」のやり方ではなく、「岩木山パトロール隊」や当「岩木山を考える会」が中心になって継続した方がよいという意見もあった。今年度の主たる事業は「岩木山パンフレット」の作成ということになった。これは、既成のもの（「岩木山」の知りマップ）があり、登山者や観光客にこれまで配布されてきたものである。植生や自然に関することは本会がこれまで調査し、集めた情報・資料等で実地踏査をする必要度は高くはないが、「登山道」にわたっては、廃道化している登山道もあるので、来月から数回にわたって「踏査」をして、詳細を把握しながら「改訂」作業に入る必要がある。

実地踏査は落ち葉や草枯れの時期である9、10月に実施したい。この登山道の実地調査には会員の協力をお願いしたい。関連して、6月22日、弘前市岩木支所商工観光課のSさんが一連の作業に関わる打ち合わせのために事務局にやって来た。作業の終了は「11月」が目処であるという。

その時、「岩木山総合もの知りマップ」に関わる資料と「岩木山環境保全協議会」の腕章などを持参した。これまでの調査では岩木山には12本の登山道があるが、現在、一般的な登山者で利用可能なのは「百沢」「岳」「長平」「赤倉」「弥生」の5登山道である。マップ掲載はこの5登山道でいいだろう。

「岩木山環境保全協議会」の腕章については、会員で、岩木山に登山するついでに、「登山者の安全指導とマナー」や「盗掘防止」などを協力したいと考えている方がいたら、是非、この「腕章」を着けてほしい。継続的に必要であれば貸与してもいいと考えている。必要な方は事務局に連絡してほしい。

★「ミズバショウ沼」周辺の刈り払い★

7月12日に本会メンバーが蝶の「ゴマシジミ」の保護のために、その生息地であるミズバショウ沼周辺の刈り払いをした。つまり、ゴマシジミの幼虫が食べる「草」である「ワレモコウ

（ナガボノシロワレモコウ）



（ナガボノシロワレモコウ）の成長を助けるための刈り払いなのである。

「岩木山麓から「絶滅」した蝶は数だけでなく、その種類も多い。近年に絶滅したと考えられるのは：オオルシジミ、チャマダダラセセリ、オオウラギンヒヨウモンである。

また、絶滅しているか、しつつある（急速に減少しているもの）は

ミズイロオナガシジミ、ゴマシジミ、ウラナミアカシジミ、オオゴマシジミ、ヒメシロチョウ、スジボソヤマキチョウ、ミヤマカラスシジミなどである。

岩木山の周囲で恐らく過去30年位の間に、これほど多数の蝶が絶滅にさらされている。このような例は恐らく日本国内でもない。それも都会の近くなら考えられるが、田舎の「国定公園」内の「自然」において見られる現象なのである。つまり、これほどに「彼女」たちの生きていく自然環境が壊されてしまったということがある。

その自然生態系を壊してしまう主な理由は、「コナラを中心とする雑木林の伐採」「山麓原野の畑地開墾や施設等建設による原野の減少」「無計画な遊歩道敷設とそれにもなう生態系を無視した整備・刈り払い」などである。（以上、阿部東会長講演資料から）

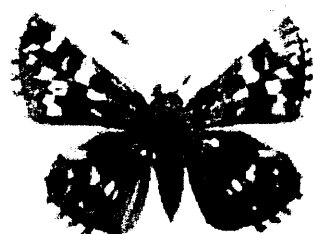
百沢と岳温泉の間から「ゴマシジミ」が姿を消した一因となっていることは「遊歩道」周囲の念入りな「刈り払い」である。蝶たちの「食草」を残すという「とら刈り」に徹すべきなのだ。

行政が業者に依頼したり、または、地元住民が自主的に「刈り払い」をすることがある。しかし、それは、ただ単純に、「その場に生えている草や小木をきれいに「刈り払う」ことで、「自然生態系」に配慮した「刈り払い」ではない。

それは、「見た目」がきれいであること、「すべてを刈り取る」ことが重視され、まるで「庭」の芝生を刈り取る行為や頭髪に喩えると「一厘がり」にすることに似ている。これだと「除草」である。「除草剤」を撒く行為に似ている。これらは、登山道の刈り払い、遊歩道の刈り払いなどでも見られることである。本会では、「自然生態系」に配慮した「刈り払い」を主張し

て、この「ミズバショウ沼」周辺の「刈り払い」を数年前から始めている。

(写真はチャマダラセリとゴマシジミ)



なお、当日の作業では次のことに配慮した。
◇ゴマシジミの食草である「ワレモコウ」は刈り取らない。
◇「ワレモコウ」の成長を阻害する「葦・蘆」の類、「イネ科の草」などを中心に刈り取る。
◇現在、花を着けている「ノハナショウブ」などは刈らない。
◇これから遅い夏や秋にかけて咲く「ツルニンジン」などは刈らない。
当日、メンバーの一人が「動力刈り払い機」を持参したので、鎌を使わず「一手刈り」作業よりは効率が良く、例年よりも広い面積の刈り払いが出来た。



ただ、残念なのは参加者が「少ない」ということである。来年は「会員」という枠を外して、ボランティアとして「市民」の参加なども計画に入れる必要があるかも知れない。

※事務局からのお知らせ※

(今号の同封物はB5判2枚の「写真展出品票」と「東北自然保護の集い」開催要項です。)

1. 会費の納入について

未納の方は会報前号に同封されていた「振替用紙」の「通信欄」に必要事項を記入し早めに納入して下さい。

2. 毎年岩木山百沢登山道整備(刈り払い)を岩木山神社と一緒に実施していますが、まだ神社側からの連絡が

なく未定です。
3. 第15回写真展「私の岩木山」開催案内と出展依頼

日時：9月14日(16日)(10日17時)・NHKギャラリィで写真搬入は会場に14日16時ちょうど・出展票は会報に同封しています。それ以上に必要な方はコピーをして下さい。

4. 「第28回東北自然保護の集い」は11月10日(土)・日(土)・日(土)岩手県の「大沢温泉」で開催されます。別紙として要項を同封しました。参加希望者は9月末日まで本会事務局・三浦章男に問い合わせて下さい。会として「一括申し込み」をします。なお、参加費の一部を負担する方向で検討しています。

※編集後記※

2月22日から事務局長日誌という「ブログ」を始めた。間もなく6ヶ月になる。とにかく、毎日書いてきた。平均して2300字以上、原稿用紙にして毎回5枚以上は書いていたことになる。今回の会報は、ブログからの転載が多い。当然そうなる。仮に会員が全員ホームページ「岩木山を考える」を見てくれると「会報」は不要になるだろう。

今、私が願うことは「せめて幹事の人がホームページ」の見られる環境を各自で、構築してくれることである。

それが出来なければ、せめてFAX受信が出来るようにして、本会ホームページやブログに書かれた連絡や行案内などをコピーして、各幹事にそれをFAXで送る体制を作ることである。「コピー・FAXで送る」幹事はもちろん私以外であることは言うまでもない。まずは手始めに、幹事の方々にパソコンの手ほどきから始めてみようか。おそらく、誰もつてこないだろう。だから、もう一度、声を大にして「会員のみなさん、パソコンは怖くありません。インターネットを始めましょう。」(M)

会報「岩木山を考える」第四十三号(二〇〇七年八月二十日発行)

発行：岩木山を考える会・会長 阿部東・事務局長 三浦章男・事務局

〒〇三六―八〇五四・弘前市田町四―二一七

TEL 〇一七二・三三・六八一九 *郵便振込口座番号 〇二三八〇―

〇一三七九一四 *振り込み先 岩木山を考える会